

研究例会報告

〈第 387 回〉

日 時：2023 年 7 月 29 日(土)14:00～16:00

会 場：オンラインで開催(Zoom)

テーマ：「場としての図書館」の概念と実践：国内の事例を中心に

報告者：河本毬馨氏(山梨英和大学 人間文化学部)

参加者：56 名

社会的課題の解決手段という観点からも注目されている公共図書館の「場としての図書館」について、その機能や役割の全体像を解明するテーマで報告を行った。

報告者はまず、「場としての図書館」の研究背景を紹介した。従来、公共図書館は資料を中心に場を構成してきた。20 世紀の情報技術の発展により、コンピュータの導入が進み、業務の効率化が進む反面、デジタル資料の発展により、利用者の来館の必要性が減少した。そのため、物理的な図書館はいずれ不要になるであろうという考えが出現した。しかし、現代資本主義のなかで、生活における自由や利便性が向上する一方、人々の社会的孤立、経済的格差、情報格差の助長、社会の分断が課題になり、社会的基盤として図書館の「場」が果たす役割が注目されるようになった。

次いで、「場としての図書館」の機能、役割に関連する先行研究を紹介した。資料提供のような従来の図書館の中心的役割、利用者視点の図書館の役割、社会の視点からの図書館の役割のような議論や、経験、革新、関与、エンパワメントの 4 つの目標を含む四空間モデルなどを紹介した。報告者は、学際的かつ多面的な議論からさまざまな「場としての図書館」の機能や役割があることが分かったが、先行モデルでは全体像を把握するのが難しいと指摘した。

上記のように課題を整理し、報告者は「場としての図書館」を質的内容分析、時系列分析、事例分析の手法を用いて検討した。

質的内容分析では 175 件の英語文献を対象に「場としての図書館」に関連する記述を分析し、「英知」、「遺産」、「コミュニティ」の象徴的基盤があり、「英知」に対して、「知性」、「創造性」、「新奇性」の概念が、「遺産」に対して「文化・歴史性」、「中立性」、「平等性」の概念が、「コミュニティ」に対して「利用者の自律性」、「公共性」、「私的性」、「社会性」、「友

好性」の概念がそれぞれの象徴を支えるとした。

時系列分析では、対象文献を年代ごと(1960 年代～2020 年代)に区分して機能・役割の歴史的変遷を分析した。例えば、知性のサブ概念である教育、学習については、図書館は利用者に対して教育をする場から、利用者の自主学習を助ける場に変化した。また、友好性のサブ概念である休憩・休息については、「コミュニティのリビングルーム」の一方で、静粛や飲食禁止などの厳格なルールも存在していた状態から、カフェの併設などで快適な読書空間を検討するように変化すると指摘した。

また、「場としての図書館」の実践の国内事例として石川県立図書館を分析した。その基本構想、HP などの内容と概念モデルを突き合わせした。

上記のような分析により、報告者は以下のような考察を行った。電子資料の普及により、物理的図書館は不要になると考えられていたが、すべての人々が電子メディアや電子資源にアクセスできるようにするための場を提供する役割が示された。すなわち、場としての図書館は、物理的図書館と電子図書館を包含する概念であると考えられる。このような、一見すると相反する概念が共存している部分がみられ、一つの施設内に性質の異なる場を包含するべきであることが示された。

結論として、公共図書館は、利用者・資料に対する平等性や、原則利益を伴わない公共性、情報専門家としての司書の存在など、他の施設ではあまり見られない特性を持っている。このような特性を持った場の提供に着目した「場としての図書館」は「場」を軸にすることで様々な立場からの視点を包括的にとらえることが可能な概念であると結論づけた。

報告終了後の質疑討論では、次のような質問が出た。今回示した「場としての図書館」の概念モデルの活用について質問があり、報告者は、今後の図書館の設計の参考になり、図書館を多角的な視点で評価できると回答した。質的内容分析のコーディングの手法について質問があり、文章を分析し、意味のあるコードに置き換えていく手法と回答した。公共性、平等性の観点は公共図書館では必須であるが、ホームレスとの共存をどうとらえるかと質問に対して、公共図書館はホームレスを排除すべきではないが、現場の実践を共有していくべきと回答した。

質疑終了後、有志でオンライン交流会を行った。

(文責 佐藤悠)